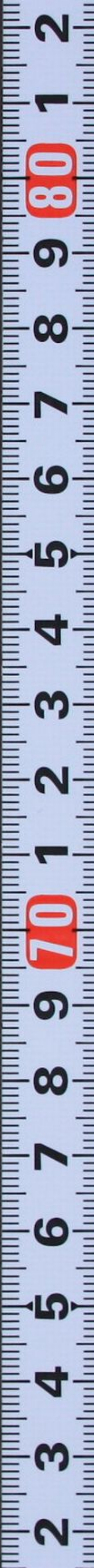


博士エドウ井ンアーノド氏著
農學士中川太郎 譯

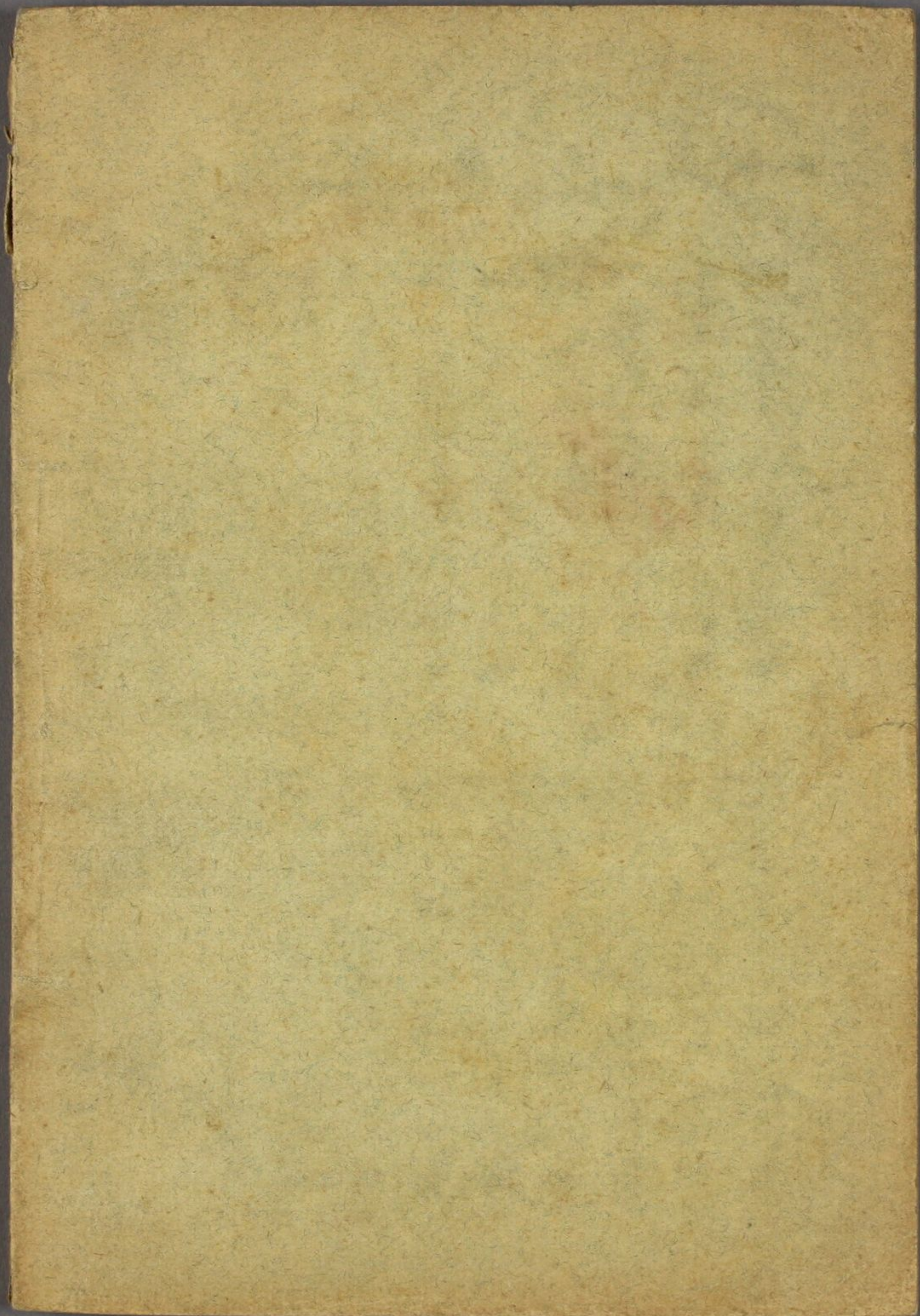
亞細亞之光輝

卷壹第

興教書院發兌







亞細亞之光輝

第一卷

興教書院發行

博士エドワード・アーノルド氏著
樞密院顧問官島尾小彌太君題字
赤松連城君 校閱
中川太郎譯

亞細亞之光輝

第壹卷

興教書院發兌

博士エドウ井ンアーノルド氏著
樞密院顧問官島尾小彌太君題字
赤松連城君 校閱

中川太郎譯

花
鳥



花月





Sir EDWIN ARNOLD,

像肖氏ドルノーアン#ウドエ

白琴



三味



Sir EDWIN ARNOLD,

像肖氏ドルノーアン#ウドエ

三味線



三味線

サー、エドウキン、アーノルド氏の略傳

第十九世紀に住む處の學者は梵語が何故も百年前まで世に知られざりしやと疑ふからん、されども百年前までの替て之を修めしもの無かりしなり、彼の賢明なる大家が梵語學の緊要を先見したるは、實に前世紀の最末にして英國と印度の交渉密なるの時代は在り、當時歐洲の學者は、早くも梵學が大學校の科程となりて、青年學者の教育に於て緊要ある部分を形成せんことを豫め察せしものも多かりき、而して一たびかゝる梵學上の刺衝を學者の腦裡に入ると否や、學者は好んで斯學に従事し、遍く印度の文學者に就き、曾て修し難く思惟せる梵學上の困難を悉く掃盡したり、夫より漸次右梵學の思想を移し來り、其高尚ある文學は遍く歐洲の學者に傳はりたり。

我々は今、エドウキン、アーノルド氏の畧傳を草せんと欲するに當り、

更に梵學傳來の鼻祖たる人々の紀念を示さざるへからず、ウヰルキ
 ンス、ジョンズ、ウヰルソン、プリンセプス、ホートン、ロソンの諸大家は、
 皆アーノルド氏の前に在りて、已に梵學を修得せし人々なり、此等の
 諸氏は最も早く印度學路の荆棘を開きたる開拓者にして、現に我々
 は其力に依て人跡絶たる思想の境に達するの新路を發見したるも
 のと謂べし、サー、エドウヰン、アーノルド氏ハ此等の人々の足跡を履
 み、進んで過去數千年間疊積したる無盡の金鑛を發見したるものな
 り、氏はかゝる無價の鑛脈に入りし以來、非常の熱心を以て休みなく
 寶玉を發掘し、多くの鑛璞を光明世界に持來りたる末、多年選擇し收
 獲したる東洋文學の光輝を廣く世界に顯示するの期に達したり。
 英國の審判官にして、サセツキス州フラムフィールドに住みたる、ロバ
 ルト、コールズ、アーノルド氏ハ、二人の非凡なる子を有せり、一をアー

サー、アーノルドと云ひ、身を政治界に顯はし、亦文學者の名を得たり、
 一は此傳の主たるエドウヰン、アーノルドにして、紀元一千八百三十
 二年六月十日に生れ、本年實ハ五十八年の春を送れり、彼れハ年少き
 頃より、夙く既に風采の見るべきものありて、將來の履歷に光彩を添
 ふるの事蹟多かりき、彼の小學日勤の進歩は常に頭角を露はし、中學
 及大學に於ても常に俊秀生に擧げられ、一千八百五十二年、年甫めて
 二十、牛津大學在學中、ベルシヤ、ザンクトン饗宴の詩を詠し、ニューダイゲ
 トの優等懸賞を得、名聲同學中に噴々たり、其翌一千八百五十三年、有
 名なるダービー伯が牛津大學の議官チャンセルに叙せられし時、撰ばれて同伯
 に對し祝賀の演説を爲せることあり、一千八百五十四年に於て、非常
 の秀穎を以て同大學と卒業し、マスター、オフ、アーツの學位を得たり、
 卒業後直ちにパーミンガムなる王、エドワード六世の學校に於て

英語部第二の教師と爲れり、されども教授職の如き無味なる事業は、かゝる秀才の青年を満足せしむるに足らず、次てアーナ府なる梵學大學の總長に任じ、兼てボムメイ大學の職員に補せられりと雖も、是とて充分の感情を満たす足らず、されども一の事情ありて彼れをして能く其地位に満足せしめたり、彼れは此地位に在りて、深く東洋の言語文學及諸般の知識を講究するの便を得たればなり、而して後來エドウ井ンある大名を世に示すに至りたるは實に此年月の賜あり、かゝる多繁の年月に於ても彼の年若きアーノルド氏の威重、機敏、秀逸の風姿を以て、完全に其職務を果し劇職の間に閑日月を送りたり、されば在職(凡五年)の間にガバナ、オフ、カウシ參議院長の謝賞を受くること兩度に及び、人皆其器量を讚美して曰、春秋尙富める才子の前途、我々は之を見んと欲するありと。

一千八百六十一年、氏の其職を辭し、眼を新聞事業に轉し、龍動府の大新聞デーリー、テレグラフの編輯局に入り、其間變幻極り無き小説、文學に關する翻譯の論說、詞藻等凡て紙上の光彩を加ふるの説は多く、氏の手になり、他の新聞に超へて讀者を満足せしめたり、デーリー、テレグラフ新聞社がジョージ、スミス氏を小亞細亞アツシリヤに派遣し、及米國紐育へレナルド新聞社と共にヘンリースタンレー氏を阿弗利加に特派し、遠く暗黒の内地に侵入せしめ、宣敎使リビングストンの搜索に従事するや、アーノルド氏は本社持主の爲め、其第一出陣の遠征隊を組織し、以て世の讚賞を博したることありき。

サー、エドウ井ン、アーノルド氏は、多くの文學雜誌に寄書せる其間に於て、亞細亞の光輝の如き雄篇の著書を爲したり、此外グリセルダ、(演劇脚本) ポエムス、(詩篇) ヒロ、エンド、リオンダー、(希臘詩の譯本) インデ

アン、ソング、オフ、ソングス、(印度バカバトギタ)インデイアンアイギル
 ス、ピアルス、オフ、フェース、ゼ、シークレット、オフ、デッス、エンドウエル、
 ヘロドータスのユーターア、タルハウシー伯の印度政史、再探の印度
 國等皆アーノルド氏の著譯に係れり。

アーノルド氏は最豊富なる文學者なり、其天然の筆頭より流れ出つ
 る處、流暢美麗の新詩、散文、皆傳ふべきの佳篇なり、且何れの學藝と雖
 も氏が達し能はざるものなきが如く、先づ氏は詩人の大家として世
 の批評の外、卓絶し、記者として、歴史家として、演劇の作者として、批
 評家として、哲學者として、皆世の喝采を博したり、而して更ニ希臘、印
 度等、東洋文學の翻譯者として、其名高し、中ニ於て梵語の轉譯は最幸
 福なる愛遇を世ニ受けたり、其高妙なる趣味と、其深奥なる藝能とは
 一々語句の末ニ顯れ、毫も原文の奴隸と爲らず、而も嚴格よその粹處、

美處、秀處を寫來れり、實ニ氏の數千年の學者が容易ニ達し能はざる
 自然の妙境ニ高歩し、獨得の妙手を以て靜かニ天樂と奏しつゝある
 ものなりと謂ふべし、我々は假令其人創造者ニ非るも、一國の高き思
 想の代表者として世ニ顯はれたるの大家は遍く全地球上の尊崇を
 受くるの價値ありと信するなり。

亞細亞の光輝原序

此書は假りも熱心ある一信者の口に藉りて、彼の高尚なる俊傑、宗教の改革者にして而も佛教の開祖たる、印度の瞿曇王子の性質來歴を描寫し、又其教理の大要を示さんと欲するものあり。

今を距る數十年前の、歐洲人にして亞細亞に、此の一大宗教のあるを知るものは、殆んど無かりしかり、然れども、此教法たるや、實も二千四百年前より弘布し來り、之を奉むる人員の夥しきと、其弘通せる地方の廣大なること決して他教の企て及ぶ所にはあらざるあり、故に此王子の教理の中に生死する人員は、四億七千万人あり、其精神上の領地は、ニールポル錫蘭より全東半島に渉り、又日本、支那、西藏、中央亞細亞、サイベリヤ等より、遠く瑞典のラプレンド地方に播及せり、而して印度に、此教義發生の原地たるを拘らず、今は殆んど之を奉むる者あり。

きお至りたれども、今日其國お行ゆる、プラマ教中お王子の訓に係る、卓越する教義の痕跡と、歴然として掩ふべからず、而も印度人の最も特異なる習慣と思想とは、正しく佛陀の寛仁ある教義に原因せるを以て、此地方も亦、佛教の版圖に属するといふも敢て不可おかるべし、是に由て之を觀れり、世界の人類、三分一以上の道義宗教の觀念と、皆其源を此王子に發せしものといふべし。

抑も王子の一身に關しては、其の傳記の甚た不充分にして詳に之を知るによしおしといへども、思想の歴史中一人を除くの外、最も高尚なる、最も温和なる、最も神聖なる、最も慈悲なる人たりしは、敢て疑はざるべきおあらざ、其細事末節に至りては、諸書中各其説を異にし、訛傳謬説捏造のもの少からざれども、佛書中に聖人たるべき知力と、熱心ある信願と、王子たるべき威嚴とを兼有せる、純淨温和の美德を、毀

傷するが如き言行、一として記載せられざるの亦甚た奇ならずや、佛教中、多くの點に關して全く誤解に陥りたる、パールセルミー、セント、ヒレイル氏すらも、尙釋尊に對して次の如く言へりとは、マクスミューラー教授の、よく引證する所なり、釋迦一身上に於て寸分の汚點なく、彼が非凡の行爲は其持論と相應せり、縱令ひ彼が、讚嘆する所の理論は誤謬あるにもせよ、彼が、一身の品行の端肅あるに至りては、毫も非議するところなきのみならず、彼の其自ら説く所の道德を成就して、自ら其龜鑑とされり、即ち出家、發心、慈悲、柔軟等を、造次にも之を廢せざ、六年間は、沈黙觀念して、以て世塵を避け、彼の教義を發見し、而して微妙の演音と確信の威力とを以て、之を五十餘年間に弘通せり、而して彼れが病を得て、諸弟子の看護に死せし時、即ち生涯の間、美事を行ひ眞理を發見したる、智惠湛然の圓寂と云ふあり、と瞿曇の世界

人心を制服せし事、此の如く夫れ大あり、是を以て其入涅槃の時に當り、余が位置に達するは、各人の能く企て得べき所なりと宣ひ、禮典と崇拜は、いたく擯斥せられたるにも拘はらず、後人報謝追慕の情に堪へず、其命に背きつゝも今日に至るまで、清淨ある廟前の、香花は鬱として林をちし、南無歸依佛の語を稱念するもの、日に幾千百萬人あるを知らざるあり。

此書に掲けたる佛陀の、實在せられしは疑ふへからざるの事實にして、耶蘇紀元前六百二十年の項、ニールポル國に降誕し、同五百四十三年の頃、ウードのクシナガラに於て入滅し給ひぬと言ふ、されば年代の點より之を云へば、圓滿長久の大願と、無量無邊の大悲と、究竟妙樂の金剛信と、人間自由の大確説とを含有せる、崇敬すべき佛教、其ものに比して他教の甚だ幼稚なるは、固より論を待たざるなり、蓋し現今

の佛教中、大ひに其躰面を辱かしむべき、荒唐無稽の事項、混同するものは此れ畢竟、奥妙不可思議の教義を、傳ふるの任に當れる人に乏しくして、凡僧の手中に墜ちたるに因るあり、抑も其根本教義の高遠にして且勢力あるは、其及ぼす所の影響に由て判定すべきものにして、説明者の如何に因るものにはあらざるなり、况んや、宗徒即僧伽サンガに基ひして成形せし、怠慢虛禮的寺院の如何に依て、評決するを得べけんや。

凡そ東洋思想の骨髓を窺はんと欲せば、又宜しく、東洋流の眼と以て之を視察せざる可らば、是れ此詩篇は總て佛教者の口を假りて、之と陳述せる所以あり、若し然らざれば、記事を神聖ならしむる不可思議の事項と、其含有する理法とを描くよ於て、決して其眞よ逼るの感想と喚起し得ざるべし、例へば轉生説の如き、當今の人、聞くもの皆一驚

を喫せざるものなかるべきも、此説たるや、遠く釋尊在世の時より確定して、當時の人は、皆之を信受して疑はざる所ありき、蓋し釋尊在世の時代より、チブチヤドチツザリのシエルサレムを取り、ミードス人のニニヅキトと滅さんとし、フオーンヤ人のマルサイユを開設せし時代あり、斯る舊教義の顛末と説明するより、儘不完全を免れざるのみならず、哲理上肝要と思はるゝ事、釋尊の在世に執られたる教化の事蹟をも、勿々陳述し去て復掛念なきものゝ如きは、詩家の常態、亦已むを得ざる事あり、然れども、若し此書を読むものよして、王子の高邁なる性質と、其教義の大要とを會得するを得ば、我目的は既に達せりと云ふべし、但し書中引用する所は、多くスペインス、ハーヂー氏の書中より摘出し、而して世人の話柄に上れる項中、改竄を加へしもの一、二は止まらざれば、學者中一大爭論を喚び起せり、されど、「ニルヴァナ」

〔涅槃〕〔ダルマ〕〔法〕〔カルマ〕〔業〕等の如き、佛教中主要の項に關しては、頗る研究と積みたる定見あり、然り而して佛教の實意は、空滅即無物を以て、人間の最上地とゐすに在りと云ふが如きは、頗る妄誕の解釋にして、斯る教義からんより、豈に能く世界人類を感化して、其三分一以上に達するの盛大を致すべけんやとは、余が固く執て動かさる所あり。亞細亞の光輝(佛教を云ふ)の宣布者(釋尊を云ふ)に歸命し、又彼れが紀念の爲に、余が能くせる所の力を盡せし諸大學者より隨順して、其實假を乞はんと欲するは、余が匆卒の研究によりて、書中儘杜撰と免まざるの一事なり、然りといへども、匆忙寸假と得ざる少日數に於て、此書を編成せし所以は、東西の知識をして、益相通せしめんと欲するの一念に在ることなきば、此書並びに余が著せる「インヂヤン、ソング、オヴ、ソングス」
「インヂヤン、アイザルス」等の如き著書によりて、印度國を愛し又其國

民を救恤したる人、即ち釋尊の紀念と永遠に傳ふるを得、本懐の至に堪へざるあり。

千八百八十四年八月

倫敦

エドウヰン

アーノルド

記す

亞細亞の光輝緒言

エドウヰン、アーノルト氏の蓋世の詩宗なり、其詩を讀む者誰か温雅適切の辞句に感じ流暢偉麗の語法に驚かざるものあらんや、況んや其性、想像力に富み詩牀自ら婉曲よして而も宏壯の氣象に乏しからざるを以て、讀者として端なく其境入り其物を見るの想あらしむるの氏が特よ長ずる所あり、然れり則殊俗異想の外人よして而も純精優美の國語よより能く東方印度の思想感情を寫出すること彼が如く、それ精妙あるの蓋し天稟の特能にあらずして何ぞや、實に氏の荊棘を薙り雜草を穿ちて空山赤嶺の間よ埋没せる金礦を採掘し來て歐米學者の市場よ齎出せしものと云ふへし、宜べなるか、其著書の學者社會に尊重せらるゝこと、殊よ亞細亞の光輝の歐米人をして佛教の眞味を玩嘗せしめたる著名の書あるを以て、嘗に歐米人之

を尊重するのみならず、我國佛教者も亦其譯出を企望して止まざるなり、頃日社友某余に其譯を求む、余固より學淺く文拙なけれ、金玉を瓦石に變せし罪、決して追るべからむといへども、詩牀翻譯の困難なる文筆秀逸の士も尙且之を難んむ、況んや匆卒の際原文の儘を寫出するの遑るく往々其添竄を恣よせしものあるに於てをや、然りとはいへども、歐米人の佛教に對する感情の如何を知らしむるに於ては、豈に少補する所るか、らんや、大方の識者幸に訂正教示の勞を吝むちくんば幸甚と云爾。

明治廿三年二月

譯者 識

亞細亞の光輝 第一篇

世界の救主 大聖世尊 悉達太子 天上天下
無比類なき 悲智圓滿なる 涅槃法教の主
釋迦牟尼佛の讚經。

英國博士 エドウヰン アーノルド 著
日本農學士 中川 太郎 譯

天の頂 その下を 世界の支配つゝのさどる
四天王の住めるなり 近きとたりよ 聖靈の
三萬年を経てし後 ふたゝび生れいでんとて
待つゝ住める處あり 佛陀をかしくありけるが

降誕あらんたしかなる
 諸天を知りて語りけり
 再び降誕あるべしと
 我今濟度よ降るべし
 我れのみならず我法を
 生死を離れ苦を終へん
 ヒマラヤ山の南なる
 信ある人の住居よて

其夜淨飯大王の

五つの祥を既よをや
 佛陀を世界をすくふため
 佛陀を之よ答へして
 これたびくの終よて
 學ばんものは悉く
 さても降らんその土地を
 釋種の中よあるべきぞ
 正しき君の在ればなり

皇后なりける摩耶夫人

王の傍よまどろみて
 六つの光線放ちつゝ
 六牙の白象あらしつ
 虚空遙かよ降り來て
 夢醒めて後摩耶夫人
 何よ喩へんものもなく
 愛でたき光り既よをや
 海は静かよ音もなく
 正午よ咲くべき花は皆
 夫人の深き悦びは

奇しき夢をば見ありけり
 赤く輝く明星を
 右の脇よ入りよける
 心の中の樂しきは
 夜を尙未明けざるよ
 地球の半ば照らしよき
 山を笑めるが如くよて
 時を待あらず開きたり
 地心の下よ及びなん

註(カマツクの乳汁の如くに白き象なり)

(山岳の震ひ)

長閑けき日かげ輝きて
 四方に讚美の聲ありて
 佛陀を下天したまへり
 佛陀の教へを聞くべしと
 リンボス全土平を得て
 愛でたき氣もて充たしたり
 語りたまへば頭には
 占夢の博士白すやう
 巨蟹の宮を太陽と
 懷妊ありて王子をば

木の蔭を照すとき
 生死を眠れる人々よ
 望みの心ふり起まし
 時よ天感地應あり
 陸と海との隔てなく
 夜明けて後よこの夢を
 半ばハ雪を戴ける
 「夫は善き夢なればすなり
 交會なせば夫人には
 誕生あらん瑞相ぞ

志かもし王子は世の中よ
 利益を與へ諸人の
 若まも即位したまハ
 時しも晝の眞中にて
 高く聳へて葉を茂り
 無憂樹の下よ立ちたまふ
 その枝垂れて日蓋ひを
 くさくの花たちまちま
 かたき岩根はいと清き

類ひもあらぬ聖りにて
 無明をやぶりたまふべし
 あらゆる世界の君たらん
 摩耶の夫人を宮園よ
 香ばしき花咲きみてる
 こゝろある木の時を知り
 夫人の上に造りたり
 生ひてぞ臥床となりよける
 玉の泉を啖き出し

浴池よまゝそは供へけれ
 太子誕生ましくて
 三十二相とたゝへたる
 まのよし早く宮中よ
 迎ひの装ひ美麗なる
 人の所業をのこりなく
 四天王よて蘇迷慮の
 東天王の從卒は
 眞珠の楯をかざしたり
 青馬のそびらよ打乗りて

さても夫人は苦惱なく
 そのみかたちを充足りて
 めてたきしるしを具へたり
 聞へまければ王子をば
 轎の輿丁は誰なるぞ
 青銅の板よかきしるす
 山よりこゝよ下りけり
 身よ白がねの鎧衣て
 南天王の鳩槃荼は
 手よ碧玉の楯をもち

西天王の龍神は
 珊瑚の楯を手よ把れり
 黄色の馬よ黄金の
 總べて彼等の行装は
 輿丁よ姿やつしたり
 人まそ知らね歩みける
 天の喜び衛るなり
 その故よしを知らされは
 心くるしく思ひしも
 金輪如意珠雲を踏む

紅ないの馬よ跨りて
 北天王の夜叉のむれ
 楯をとりてぶしたがる
 目よは見へねど降り來て
 諸天も其日諸人と
 まは釋尊の降誕を
 さはれ淨飯大王は
 種々の異なる兆を見て
 占夢の博士の告げよより
 駿馬、白象、主藏神

主兵の臣よ玉女ふる
 一千年に唯一度
 類ひまれなる聖王と
 いと賑はしき祝祭を
 されば市街を掃き清め
 樹々よは旗をひるがへし
 劔を抜き舞ふもあり
 舞妓は羅綾をひるがへし
 鹿と熊との皮きたる
 相撲の力士鶏合ハセ

七つの寶身よそなへ
 支配のためよ世よ出る
 なるべき王子と聞知りて
 都市の中よ命じける
 薔薇の香をかほらせつ
 くまなく燈火かゝげたり
 戯術幻術綱わたり
 鐘鼓彈弦相和しつ
 奇しきおどり虎つかひ
 樂人あまもうちむれて

その賑ひはながくよ
 夫れのみならず遠きより
 太子の誕生祝はんと
 よしき織物縫ひのきぬ
 珠玉は光りを争へり
 祝ひの心盡しける
 悉達多とよびたるは
 畧語とあそは知られけれ
 頭に霜を戴ける
 永く浮世の塵を避け

言葉よ盡すべうもなし
 つどひ集る商人は
 黄金の盤よさゝげたる
 眞珠梅檀くさくさの
 所屬の市府も劣らじと
 されば太子の幼な名を
 總べて榮ゆるてふ文字の
 つどへる人の其中に
 阿私他の仙と稱するは
 俗事は絶へて聞かざるも

世尊せそんの降世こうせありしをば
 彼かれは齡たいと斷食だんじきの
 智識ちしきを得はてしものなれば
 王わうは間近まぢかく招まねきよせ
 夫人ぶじんもやがて幼兒おさなごを
 ねかんとまそはしたりけれ
 さなし給たまひそと云いひつゝも
 幼おさなき太子たいしはとが君きみが
 君きみは正まさしくまの御兒みこが
 三さん十じゅう二に相そう八はち十じゅうの

諸天しよてんの歌うたも聞き知しれり
 功徳くどくよよりて廣大くわうだいの
 いと尊たうとくぞ見みへにける
 厚あつく敬禮けいらいしたまへば
 かかの仙人せんじんのあしもとに
 阿私あじ他たは急きうよおし止とどめ
 八やたび首かうべを地ちよつけて
 これらも伏ふして拜はいすべき
 薔薇ばいばいの光色こうしきあしの紋もん
 隨形ずいぎやう好こうを見みるときは

ああの君きみあそは佛陀ぶつだなれ
 その法ほり學まかぶ諸人しよじんを
 さるを我われ今いま年とし老おひて
 聞きかざることぞ恨うらみなる
 拜はいしたるこそまだしもの
 嗚呼あ大王たいわうよ太子たいしこそ
 人ひとの樹林じゆりんも咲さきいづる
 されば一ひとたび開ひらきなば
 愛あいの甘露かんろを撒ちらすなり
 天てんの蓮花れんげは生おひ出いでん

尊たうとき法ほりを説とき示しし
 助たすけ給たまふよきハまれり
 死期しごも近ちかきよあるなれば
 さはさりながら太子たいしをば
 幸さいわひとこそ云いふべけれ
 數すう萬まん年ねんよ唯ただ一いち度ど
 愛めでたき花はなと知しりたまへ
 世界せかいの上うへよ智惠ちゑの香かと
 君きみが王家わうけの根ねよりして
 實じつよも此上こよなき幸さいわがかし

忘かばあれども復太子ゆへ
貫ぬく如きことあらん
復善き夫人の君の
人天共々敬愛を
もはや悲哀はあらざるが
されば七日のその内よ

一 劍君が腸を
免れがたきことわりが
誕生ありしそれゆへよ
表し居るなる善き夫人
夫れ生命は悲哀なり
君の悲哀は終りなん

第七日のその夕
笑めるも如く眠りけり
心寛かよ忉利てふ

摩耶の夫人は眠りけり
睡りは遂に醒めずして
天よ登りたまひける

その身は諸天善神の
樂み極めたまひあり
乳を太子よ奉り
佛陀世尊の唇を

渴仰うけてまの天の
姨母の摩阿波闍波提女は
世界よ福を授けてし
みづから養ひまいらせぬ

夙く八年を過ぎければ
太子たるべき身を以て
技藝を吾兒に教へんと
そは何故ぞ王は尙
佛陀の光榮とその道に

注意せかるゝ大王は
知らでかなわぬ諸般の
思ひが起したまひける
奇しき兆のあるを忌み
到らん爲の苦行をば

あらずもがなと思ふゆへ
大臣あつめ問ひたまふ
知るべき業とのこりなく
たゆべき者は誰ならん
「毘奢蜜多羅は二人なく
奥義を究め諸般の
彼れにますもの候はず」
吉日撰みまみへける
鋼玉石の粉を撒ける
師の前近く立ちたまふ

かくは急ぎて諸々の
「そも太子たる身にありて
教ふる師とし仰がんよ
各々直ちに答へらく
賢き上に經典の
學問技術に至るまで
毘奢蜜多羅は命をうけ
太子は寶石ちりばめて
香木盤と筆を執り
毘奢蜜多羅は徐るに

ガヤトリとさん呼びあせる

貴種の人のみ學ぶべき

偈文を静かに讀誦せり

オム、タトサビタームレニナム、
ヤエー、ヨ、ナ、プラーコーダヤツト、

バーゴ、デハスヤ、ガーンマハイ、

ガヤトリとは波羅門教の聖書カ荷吠陀中の偈文にして、英語にて其全文を
示さば(牛津大學梵學教授のモニエル・ライルリアムス氏の
インディアンの第二十頁に出づ)

“Let us meditate on that excellent glory of the divine vivifer;
may he enlighten (or stimulate) our understandings.”——Professor
Monier Williams’ “Indian Wisdom”, p. 30.
之を和譯せば

神の光を思慮すれば 我等が智慧もあらはれん

こは波羅門教徒か、朝暮の拜禮に唱ふる處の秘密の偈文にして亞細亞の光輝
に此英譯なし

毘奢蜜多羅は御身には
告るに太子猶豫せず

註(古代の書法
なりと云ふ)

バルシヤ、ウツク、ヤバ、チルチ

種々の文字を用ゐつゝ

蛇を拜する地下の人

メージャー人や埴上に

凡そ世界に在りと云ふ

師のいふまゝ句節をば

毘奢蜜多羅は之を見て

夫の經かきて見たまへと
唯一牀の書にあらで

ナグリ、ダクシン、ニ、マンガル、

シクヤニ、ダラド、マナ、マナヤチャ、

穴居する人海の民

火や日輪を拜する人

住める人等の文字記號

あらゆる國語用ひつゝ

一々書きず記しける

「もはやそれにて餘りあり

されば算數に移りなん

一二三四十までよ

終にラクまで讀みたまへ

一十百位ラクまでよ

聲もしづか言ひけるは

ニナハト、カンバ、ビスカンバ、

ガンヂカス、またウトパラス

ハスタギリの地をくたき

さて其次を夜の星を

また其次は大海の

まづ我がいふに從ひて

十より百に千までよ

太子は彼れが云ふまゝよ

至れど猶も止まらず

「さてその次は俱備那由他

アバブ、アツタ、クムツより

ブンダリーカスその上を

微塵よなせるバツマスが

記す用ゆカタよして

滴數ふるユケカタが

インガよりしてサルバニケパ
アンタカルバは其次つぎに
一いち万まん年ねんの其その間あいだ
雨あま滴しづくの數かずとこそはしれ
未み來らいと過くわ去この劫じやく數すうを
マハカルパスマハカルパスに至いたるなり
善よい哉や太たい子し既すでにえや
いま某それがしが尺しやく度どまで
太たい子しはいとも謙けん遜そんよ
パラマーム十じゆを合あせあば

恒こう河がの濱はまの砂いさごの數かず
いよくすゝみて阿あ僧さん祇ぎを
日ひごとに世せ界かいよ降くだるべき
かほ其その次つぎは天てん神じんの
數かずふると云いふ大たい數すうの
仙せんはその時とき云いひけらく
これらを知しりておわするよ
教がへん要ようは更さらよ無あし
師しよ我わが言ことを聽ききたまへ
パラスクシユマと成なるがかし

その復また十じゆはトトラセレン
日にち光こう中ちゆうに浮うびある
その復また七しちは小こ鼠ねづみの
十じゆは即すなはちリキヤと云いひ
其そのまた十じゆは蜂はち腰こしの
マンマンググよ芥け子し大おほ麥むぎの
指ゆびの節ふしなりふれをまた
註しゆ大だい指しゆと小せう指しゆとを張はり延のばしたる長ながさ
註しゆ肘じゆうより中ちゆう指しゆの長ながさに至いたるまでの長ながさ
そを復また二に十じゆ合あすれば

之これをば七しちつ合あせなば
極ごく細さい微み物ものの長ながさなり
髯ひげの尖さきなりそのさきの
リキヤ十じゆをばユカと云いふ
七しち倍ばいといふ麥むぎの心こゝろ
粒つぶの長ながさよ其その十じゆは
十じゆ二には即すなはち一いちスパン
漸おだく進すすみてキユ一いちビツト
杖つゑ弓ゆみ槍やりよ至いたるべし
一いち度ど吸い氣きするその内うちよ

人の走れる長さあり
 師よ今われはヨシヤナには
 其數あげて示さんと
 仙は痛くも愕きて
 太子は實に大師なり
 嗚呼某は太子をば
 太子は書籍よよらずして
 尊敬心のあることを
 來りたまふに外ならず
 師の仙人よ盡しける

尙その上はガウ、ヨシヤナ、
 幾個の塵をならぶるか
 云ひつゝ直ちよ讀みたまふ
 「太子は教師の教師なり
 唯れか太子の師たらんや
 仰ぎて拜したてまつる
 萬事を知るしめすことよ
 示さん爲よこが門よ
 太子は厚き敬禮を
 言語柔和よ賢くて

容貌威ありて猛からず
 慈愛の心深かりき
 羚羊の狩のそのおりに
 太子よ及ぶものかなき
 兵馬を御する熟練の
 而かれど狩の半ばよて
 鹿を走らすこともあり
 馬の苦しき呼吸を知り
 憂へんさまを見るときと
 自ら思ひ知るときは

所作は優美よ鄭重に
 されど勇氣に至りては
 騎馬の童子の多かるも
 園よ催ふす擬戦よも
 彼れよ及ぶは無かりけり
 太子はとどと止まりて
 半ば勝ちたる競馬よも
 復友人のうちまけば
 競ふ心の果敢さを
 とどと止まることもあり

雙葉の幼樹年を経て
榮ゆる如く慈悲心を
忘めはれども今尚
悲哀苦痛の真相は
及ばぬことと夫を道理なれ

いとも長閑けき春のころ
ヒマラヤ山の半腹なる
音高らかに放ちつゝ
太子の従弟提婆達多

下蔭廣き大木と
年を逐ひて彌増せる
幼き身よておとすゆへ
如何なるものか考察の

御苑の上よ鴿は
己が巢さして愛戀の
群を連ねて翺りたり
弓よ箭つかひ兵と射る

ねらひ違はず眞先なる
大地よ落ちて紅なひの
太子を結跏趺座しつゝ
芭焦の巻葉ののびし如き
亂れし翼を齊へつ
弓手よ鳥を持ちつゝも
矢の根を抜きて疵口よ
濺ぎていたりたまひけり
痛みの真相知らざれば
手くびよ強くおしあてゝ

鳥の翼を貫けば
血潮は翼を染めなせり
鳥をば膝よかきのせて
いとやはらかき手もちて
とゞろく動悸を撫で静め
右手もて無残よ貫きし
露冷かなる蜜汁を
さるよても復太子には
我と親ら矢の根をば
痛みを覺へ愛憐の

情を涙と溢れ出で

再び鳥をいたわりぬ

その時提婆の使ひ人

來りて太子よ白しける

「わが君鳥を射たまひて

薔薇の間に落ちたるを

命を受けて某は

受けとらん爲まいりたり

太子よ渡したまわれと

悉達太子の答よは

「いな渡すよを及ぶまじ

その鳥にして死したらば

殺せし人よ送らんは

理の當念といふべきも

鳥は今尙生命あり

汝が君は進行を

止めしのみよて去の鳥を

取り得しものと思ふなよ

提婆達多は答して

この鳥雲間よあるほどは

人のものよをあらされど

落とし人よ屬するを

その死と生よかゝはらず

既よわが矢よ墜ちぬれば

わがものたるを疑はじ

太子よ返したまへがし

太子は己が滑らけき

瞼よ鳥の頸をあて

いと嚴そかよ宣ふは

「いふ去の鳥は我がものぞ

我れ天權の慈悲よ依り

我がものとなしはぐまん

足下はあづかる所なき

餘處ある鳥と思はれよ

とれ今感ずるところあり

遍く慈悲を世の中よ

教へんところを期するなれ

無言世界の譯者とし

人のみならず一切の
 思へることを知りたまへ
 賢き人の言を聴け
 正邪如何を論ずるよ
 定めかねて居りける
 聖僧出で云ひけるは
 助けんとする人あらば
 所有の權を多からん
 害ひ毀つのみなるも
 存する理致のあるなれば

苦惱の淵を涸らさんと
 足下は猶も疑はゞ
 衆議に附してこのまとの
 ろの曲直を執れとも
 かるゝ折しも一人の
 そも纒なる生物も
 殺さんとするものよりも
 殺さん人は生命を
 助くる人はその物を
 彼れは鳥をば與ふべし

まの裁判を誰人も
 王は人してまの僧を
 何地行きけん影もなし
 蛇を見ふりと云ふ人の
 示現なりとは知られあり
 顯ハしたまふ元始なり
 癒へて再たひその群よ
 鳥の憐み而已ぞ知る

正しきものと思ひあり
 尋ねけれども早已に
 されどもまゝを匍ひ出る
 在るより見れば天神の
 是れ釋尊が慈悲心を
 然るも彼れの慈悲心は
 悦び還る唯一の

或る日よ於て大王は

「來れ愛子よともよ見ん

見よくかゝる春景色
 饒多の富を興へなん
 民を養ひその君の
 みの領國も時來り
 御身のものとなるがし
 照りかふ花を野邊に満ち
 いと麗ハしき景色がと
 馬をすゝめてながむれば
 きしむ聲する軛をば
 起きて轉べる有様は

肥へある土地は蒔る人よ
 復如何ほど我が土地は
 懐滿たすことなるが
 こも身烟とならんととき
 若葉も草も緑り添ひ
 耕す聲も興添へて
 云ひつゝ二人もろともよ
 牡牛は強き肩をもて
 牽くや肥沃の土塊の
 長く滑らかなる浪の

犁より起る如くなり
 細浪うてる水流の
 檸檬草の生ひ茂り
 林よ巢ふ鳥の歌
 甲蟲爬蟲啼きすだき
 芒果の枝よ鳥は居て
 野牛の間だよ白鷺の
 黄金色なす大空よ
 彩色なせる殿堂の
 遙かよ聞ゆる村太鼓

棕櫚の間よ音たてよ
 岸よ咲き沿ふ鳳仙花
 彼方は種蒔く人のあり
 深く茂れる叢村よ
 春を樂む如くなり
 下よハ栗鼠の走るあり
 威高く歩むも見ゆるなり
 鳶はかけりて輪を畫き
 圍りは孔雀飛びかよひ
 婚儀を祝ふ聲すなり

萬のけしき太平の
 太子は喜びたまひけり
 彼れを知りけり生活の
 口を糊せんその爲よ
 骨をも身をも摧くらん
 牛とあへぎを共よしつ
 刺針の衝に當らん
 蟻は蚶蜴の餌と爲り
 その復蚶蜴蛇よして
 雀は百舌鳥の嘴に

象ならぬはなきを見て
 されども深く想ひ見て
 薔薇よは刺の生ずるを
 黔き農夫をいかばかり
 燃ゆるが如き暑さよは
 鵝絨なせる牛の腸
 猶それのみにあらずして
 蚶蜴ハ蛇の食となり
 鳶の餌食となるならん
 その身と共よ我が把りし

ものをも食とせられなん
 殺せるものも殺しある
 蠕より人よ至るまで
 弱肉強食定めかし
 殺害するよ於てをや
 修羅の巷と謂つべし
 まれが彼等のあらとせる
 さるよても復農夫等の
 鹽味を帯ぶることならん
 林の中よ強弱の

生は死よ依り生活し
 ものも再たび殺されん
 互よ殺し殺されて
 況や人を同類を
 されば目よ見る好景も
 太子は痛く嗟嘆しつ
 幸福の地といふべき歎
 もちある麵包は汗じみて
 牛のくるしき幾何ぞ
 争ひ常よ劇しくて

空飛ぶものも水中よ
 みの苦しみを免がれん
 かくて佛陀は瞻部樹の
 深き病の考察を
 深き病の源は
 癒すてだては如何ぞや
 苦惱を除く観想は
 凝りて何時しか精神も
 汚れも永く消へ果てつ
 先禪定よ入りたまふ

泳げるものも如何でかは
 視念すへきはこゝろがし
 下よ膝組み生活の
 みの時よまを舐めけれ
 何處よ在りや之をまふ
 慈悲愛憐の衷情と
 心の中よ溢れつゝ
 おぼろよなりて慾と我が
 この道たどる第一歩

みの時五個の神仙は
 巔高く飛びけるが
 過ぎよし時よ自在なる
 その働きを失ひて
 彼等は問ひきそも如何よ
 如何ある殊勝の力ぞと
 感ずることを得ればなり
 知るべき力あればなり
 救世の思ひよ沈みつゝ

註(羽衣きたる天人)
 太子の在す樹の上を
 彼等の翼忽ちよ
 飛行の術がかりける
 我等の飛行止むるは
 彼等は凡べて神力を
 清き聖の存在を
 見おろす下よ釋尊は
 薔薇の色なす後光をば

放ちて爰に居ましけり
仙等よ是れぞ世界をば
降りて拜しまつるべし
讚美の歌を唱へつゝ
雲井遙に飛び行けり

森の中より聲ありて
救はん爲の佛なるぞ
こゝに彼等は降り來て
諸神に告げんその爲に

はや日中も過ぎ去りて
時ハ來れど彼れハ猶
總べての木影は移りしも
陰のみ移りやらずして

日も西山に春かん
静慮に入りてれをしける
彼のおはする臆部樹の
その頂を掩ひつゝ

斜陽の射るを防ぎたり
太子よ胸の叢雲の
我も蔭をばうつすまじ

時よ梢に聲ありて
霽れて隈なくふるまでハ

亞細亞の光輝 第貳篇

光陰關かく釋尊も
 王は令して宮殿を
 スバ、スラムマ、ラムマとして
 一は角ふる材を用ひ
 冬のためとして暖かよ
 花紋ふせる大理石
 また他の一を煉瓦よて
 チヤムバクの萌へ出る時

二九の齡とかり玉ふ
 太子の爲よ造らしむ
 三個の宮居は宏大よ
 内は檜の板はりかざし
 他は石造の殿つくり
 夏のためとして冷かよ
 青き豊を覆ひけり
 種蒔く春が愉快なる

これ等の殿のまわりには
 繞る流れの水清く
 あかたこかたに美麗なる
 芝生の景色一入よ
 悉達太子は此園よ
 素より富有の身になれば
 性亦人に立ち勝り
 されば世よある幸福を
 憂き世を思ふ哀念の
 是れかほ清き湖の

かぐめもつきぬ御園生よ
 花さきにほふ艸むらの
 小家もありて緑り添ふ
 目をかぐさめぬものかき
 己か随意よ逍遙し
 時々遊樂さまをかゆ
 いと明敏よおわしけり
 受け玉はざる時かきも
 蔭は心を覆ひたり
 鏡よ似たる水面よ

浮べる雲の影を受け
 之を見るより大王を
 卿等さきよ老仙と
 いかよ考へ居たまふぞ
 わが心臓の血よりかほ
 愛子はあらゆる敵人の
 残る隈なく世界をば
 王とさるべき善運は
 若し然らずは太子よを
 淋しき道を悲しくも

光を失ふ如くかり
 大臣集め問ひ玉ふ
 占夢の博士の豫言をば
 彼れをかくこそ言ひにけれ
 我の爲よはいとおしき
 首を足下よ踏みしきて
 支配あしてぞ王中の
 固より望むところなり
 棄欲の心と信仰の
 たどるところは云ひよけれ

今我が殿に居るとても
 求むる如く覺はたり
 太子の世界支配する
 如何なる術あるからん
 はや我が爲に評議せよ
 ものはいひけり大王よ
 あさき病を癒すなり
 つまびん事は容易なり
 經驗だもあき事なれば
 御伽のものを求むるは

彼れの心は此の道を
 されども賢なるおんみらよ
 心起さんその爲よ
 我れに忠なる卿等よ
 中よいとゞ年たけし
 そも愛戀はこの如き
 婦人の術もて彼の胸を
 太子は未ださるものよ
 柔和の夫人うるわしき
 これ最上の術ならん

青銅の鎖を用ふとも
 婦人の髪の一すぢは
 この術計は妙なりと
 王は答へてよしさらば
 人の好は志りむたし
 彼れのまわりを取まきて
 撰めとさとし聞ゆとも
 娯樂を程よく避けんのみ
 「されども多き女子の中
 樂士に見ゆる顔せや

止めかねたる哀念を
 容易に之を縛し得ん
 共々賛して奏せしよ
 后妃を求め與ふるも
 たとひ美麗の園をもて
 己が好める其花を
 彼れ唯咲みてまだ知らぬ
 他の大臣の云ひけるは
 婀娜たるものもあるれば
 世界の闇をさますてふ

黎明よりもあてやけき
 ねがふは公開の節宴よ
 乙女等多くつとつと
 命じ玉ひて勝れたる
 褒美の品を賜ひてん
 太子の御座を過ぎんとて
 動かすものゝ一二人
 これぞ愛戀その物の
 これぞ殿下を幸福よ
 大王喜び容れ玉ひ

美人もかきよあらざれば
 容貌うるとしき國內の
 釋種の手慣れし遊戯をば
 ものよは太子御手づから
 かくて褒美を受くるもの
 憂きよ沈める玉顔を
 やはかふき事あるべきぞ
 眼もて愛戀撰ぶふり
 導く術よ候ふぞ
 障あらざる日を撰び

傳令役よりしめすやう
 上の仰よあるなれば
 皆宮殿よ集ひ來よ
 賞與の賜あるべきぞ
 最も貴き品を得ん
 妙徳城の乙女等は
 かみもあらたな櫛けづり
 肩掛衣服すべて皆
 かよはき手より足までも
 装ひ凝らす童女等を

遊戯の會を催さん
 形すぐれる童女等は
 太子自らそれくよ
 最も勝れるものはまた
 されば其日よふりぬれば
 己がとなく装ひて
 清く浴みし香を吹き
 互よ華美を争ひて
 眞紅色よ化粧ひせり
 歩み静かよ御座近く

進みよければ流石よも
 地上よ注ぎ見上げ得ず
 心動かす事なくして
 受くる乙女等かしくみて
 或る愛らしき乙女子は
 笑をまねくよ足りふんと
 祝ひの聲を放つとき
 逃るも如く賜を
 ふるひ慄き歸りけり
 おわすることぞ音ならぬ

彼等の黒き眸は
 太子は温雅よ露ほども
 めましよければ賜を
 仰ぎ見るものなかりけり
 他またちまさり此君の
 爰よ集へる人々の
 怖ぢ恐れたる羶羊の
 得るとそがまよその群よ
 かくも太子の神聖に
 かくて次第に乙女等は

一人くよ賜を
 都の花も残りなく
 かゝるおりしも進みしは
 寶座よ近く進み行き
 看つゝ太子は忽ちよ
 御側よ侍べる人々は
 天津乙女の婀娜態
 夫戀ふ鹿の目もとせる
 筆よ寫さんやふもなし
 氣高き頸はうつむかず

得つゝ歸りて今をはや
 賞與の品も盡よけり
 是れぞ耶輸陀羅少女なる
 静かよ立てるその人を
 いたく驚き玉ひしを
 よく目のあたり見たりけり
 歩めるさまは毘摩か
 その顔せのうつくしさ
 拱きし手を胸よあて
 なむむる太子打ぶめ

「太子よ妾よ賜ふべき
 尋ねよければ答へして
 されどめてたきこも都府の
 御身よあれば今これを
 綠玉石の頸環をば
 胸のまこりよまとひつゝ
 愛の光を放ちけり

その後永く年を経て
 何故ありて其始め

物やおとす」とあましげよ
 「たまものはみな盡きよけり
 ほまれとあらんうつくしき
 代りよあたへ得させん」と
 やをらはづして耶輸陀羅の
 互よ見合すまふじりを

佛道成就ありしとき
 釋種の少女見玉ひし

其折からよ御心の
 問はれて佛陀は答へけり
 始めてあひしよあらざるぞ
 獵師の男兒ありけるが
 ヤムンの泉の邊にて
 タベよ野兎の戯れて
 縦の木影よ打集ひ
 彼れは審判を掌る
 おんを頭よ附けたるが
 少女は遂よ勝ければ

遽よ動き玉ひきと
 「我々二人その時よ
 久遠のむかし一人の
 難陀天女の立たまふ
 森の少女と遊びつゝ
 輪を成し走る様をふし
 走り競ふその時よ
 少女を各々かこりたる
 いと終りよ走りける
 男兒は馴れたる鹿の兒よ

おのづか心の愛戀を
 されば彼等は林中よ
 連理の契り淺からず
 看よ陰れたる種子よても
 芽ぎすが如く善惡も
 過去の志とどは時來り
 甘き菓や酸きこのみ
 かくいふ我れは其時の
 耶輸陀羅はかの少女なり
 過ぎよしちぎり今もまた

そへて少女よ與へたり
 樂しき月日送りつゝ
 共よ生とば終へたりき
 雨ふきあまたの年を経て
 苦樂愛憎みふすべて
 輝ける葉や暗き葉や
 持ちて再びあらはれん
 遊びを爲せし男兒にて
 生死の輪廻はてしなく
 二人の中にあらとれき

太子手づから褒賞を
 晴れの試場の有様を
 事の始終を奏しけり
 耶輸陀羅少女を看るまでは
 ふと見玉ひし其時は
 少女を太子をうち仰ぎ
 寶賜ひしその事と
 様子と大王聞き玉ひ
 好餌とこそは得たるなれ

授け玉ひしその時の
 見聞く人たち大王よ
 善覺長者のむすめなる
 如何も無心よ在せしか
 如何も御氣しき動きしか
 太子は少女を看守りて
 すべてふたりも愛憐の
 看よ我々は既よはや
 雲井を翔る隼の

となよ落るも遠からじ
 約を少女よ結ぶべし
 高貴の美姫を娶るよは
 人よ對して己が身の
 王者といへども免れぬ
 かれば其父云ひけらく
 吾愛は見おちこちの
 求むることの切かれば
 弓馬劍道皆すべて
 とれらば榮如何あらん

使送りて婚姻の
 されども釋種の習はせよ
 まづその武藝を試むる
 手練の技をあらはずは
 古き定めとしられたり
 先づ大王よ告げ玉へ
 公子等互にあらそひて
 いと温和なる皇太子
 彼等よ勝り玉ひさば
 太子は實に諸々の

藝道こそ勝るらめ
 籠りがちよておとすれば
 斯る答へよ大王は
 そは何故ぞ太子よは
 迎へんことを望めるも
 調馬の術に名を得たる
 劍法無二の難陀あり
 笑つて云ひきこれ亦
 彼等の好める藝能は
 如何なる人よも立合はん

志かはあれども太子よを
 此こと如何よあるやらん
 轉た心を痛めけり
 かのうつくしき耶輸陀羅を
 弓よ長ずる提婆達多
 アーヂユナありて尙も亦
 されど太子はひそやかに
 これ等の術は修めたり
 如何なる試合も肯はん
 これ等如きよ躊躇はず

父王の令を待たんのみ
無下に失ふことやある
悉達太子は誰よても
望まん人よ會しさん
冠りたらんその事を

我身宿世の愛情を
第七日をトひて
武藝よおける試合をば
耶輸陀羅嬢は勝つ人の
あまねく傳へておきてけり

第七日とかりければ
愛の獵場の名花さる
かなづる樂の音よ連れ
角を黄金の飾せり

釋種の貴族集りき
耶輸陀羅嬢も親族も
飾れる輿を牽く牛の
先づ王族のデバタツタ

貴きナンダ、アルヂユナや
いふべき人の耶輸陀羅よ
太子はおのが白馬の
驚かさされて嘶ける
出で來りつゝ國王と
異なる食よ生活し
王化の澤よ潤ほへる
かくて太子耶輸陀羅を
絹の手綱を引きしめて
最も價値のなきものよ

皆少年の花としも
望をかけぬものぞなき
かくめづらしき外界よ
カンタカの脊よ跨りて
異なる家よすまるしつ
されど苦樂は同じくし
あらゆる民を見やりけり
看玉ひし時ほくそ咲み
ひらりと大地よ降り立ちて
いかにでかかゝる眞珠をば

持つべきことのあるべきが
 こがくまでよ少女をば
 ありやふしやを今爰よ
 叫び玉へば弓の手を
 青銅鼓を六ガウの
 アルヂユナもまた六ガウよ
 共よ置きてぞ控へける
 遠きよ置かせ玉ふゆへ
 的とふせるが如くふり
 いざとはかりよ兵と射る

これと競はん人々よ
 求めんとせしその甲斐の
 いざ試みん來れよと
 ナンダとさらばくらべんと
 隔たり遠く置きければ
 デバダタ公子は八ガウよ
 さるよ太子と十ガウの
 恰も小貝の殻をもて
 三人のものは矢をつがへ
 ねらひ違はずアルヂユナも

ナンダも共よ一様よ
 殊よ勝れてデバダタ
 まとの両面射ぬきたり
 その妙術よおどろきて
 之を見しより耶輸陀羅は
 あらざるべきかと恐れつゝ
 三人の把りし其弓は
 銀の弦かけとたし
 強き弓をも太子よは
 少しく弓をひきければ

おのがまとよぞ射あてける
 すぐなるねらひ過たず
 こゝよつどへる群衆を
 やよとばかりよほめよける
 もしや太子よ過ちの
 看るよ堪へずと眼掩ひき
 漆を塗りて筋を捲き
 強卒さらではひき得ざる
 取り試みてあざとらひ
 その正中のふとかるも

折れて二つとかりよけり
 遊戯に用ゆべくあるも
 誰れよてもあれ今すこし
 弓を持つものあらざるや
 「かの神殿よおさめたる
 由來久しく知りがたし
 よしつるかくる人あるも
 太子命じて是もまた
 持ち來れよ」とありければ
 往時の弓はくろがねを

太子は云ひき「此弓は
 愛よは用ひ得ざるべし
 釋種の公子よ適すべき
 一人答へて云ひけるは
 獅子頰王の大弓は
 弦をかけたるものもかく
 これをひくものよあらじ」
 人の用ゆる武器ふれや
 頓て彼等の持ち來る
 きたひて造りおせるよて

野牛の角の様をかし
 卷鬚をもて飾りたり
 膝よ横たへ強弱を
 「こがいとこたち今一度
 いはれよければかかくよ
 太子は少く身をもたれ
 難なくかけて強音を
 空を翔れる大鷲の
 高く清けくかりとたる
 かよときものあやしみて

分支のまがり黄金の
 太子はやとら手を取りて
 再び引きて試みつ
 此弓をもて射玉へ」と
 彼等の手よはあひかたし
 弓をまげつゝそのつるを
 するどく響かせ玉ひけり
 翼の音する如くにて
 その日我家よ留まれる
 「それも彼音は何事ぞ」

人々これに答して
射んとがなさせ玉ふなる
太子は弓と矢をつがへ
空をかすめて過たず
打ぬくのみか野の面を

「これぞ太子の弦かけて
獅子、頬王の弓の音」
きつて放せば疾き御矢は
いと距たれる鼓をば
遙かに飛びて影をなし

次と出で来るデバダツタ
厚さ六指のタラス樹を
アルヂユナはまた七指の樹
悉達太子は二株の

いざや劍道比べんと
只一打と切りよけり
ナンダは九指の樹を切り
相連れるその樹をば

空よ閃めく電の
御手のいたく汚れたれば
幹は依然と立ちたりき
「彼れの刃をそれたるぞ」
見てぞおのゝき恐れける
南の方より軟けき
一雙の幹は縁なる
地上よこそハ倒れたれ

たゞ一打と切り玉ふ
地よも倒れず其儘よ
さこそとナンダは叫びけり
乙女は直よ立てる樹を
始終を見居たる風神は
風をば吹かせたりしゆへ
その巔と諸共よ

彼等は又も逞しき

駿馬を爰に牽き來る

されども白きカンタカは
 泡の口より垂れ落ちて
 二十の槍の長さをば
 來れる馬のその中に
 遙か後べよおくれたり
 我々としてもカンタカの
 ふどて勝たざる事もある
 人々をして見せしめよ
 跨る事を得べきやと
 暗夜を欺く黒馬は

疾き事恰も矢の如く
 地面に達するその時間に
 はやくも飛びければこそ
 いとすくれたるものさへも
 ナンダをさほも懲りづまよ
 如き馬をば持ちぬれば
 されば荒馬ひき來り
 誰れかよく其あら馬よ
 命よ從ひ牽き出す
 三すじの連鎖ひひかれつゝ

はげしきまごし廣き鼻孔
 誰れとして未だ乗らされば
 三度釋種の公子等は
 すまひふければ飛び狂ひ
 得つるは塵と耻とのみ
 脊よ止るを得てしかば
 一鞭あてゝ轡をも
 口をば持ちてありければ
 交々おこる怒氣奮氣
 不意に齒をむきアルヂユナの

ふさふし垂るゝ鬣や
 蹄鉄も穿たず鞍おかず
 各々これに乗らんとして
 彼等を大地に投げしゆへ
 只アルヂユナを暫時の間
 連鎖放ちつ横腹よ
 縮て力のある限り
 悪馬を何とて猶豫せん
 一回廻りて來るまよ
 足よ噛み付き引きおろし

あゝや公子は此馬よ
馬丁は慌てゝ集ひ來つ
引き止むるを得たりけり
「悉達太子をこの駒よ
その肝臓は暴風ふり
されど太子はのたまはく
前髪あれば事足れり」
「何よかあらん囁きつ
前よ置きつゝ静かよも
背と波立つ横腹を

殺されんとぞ見へよける
漸くよして此馬を
されば叫べり皆人を
觸れしめ玉ふこと勿れ
血はまた燃ゆる酸ふり
「連鎖を放てまれば唯
やはらかく手よ握り持ち
右の手の掌馬の眼の
怒れる顔と撫でをろし
とすりよければ不思議よも

緇黒の駒もその猛き
恰も彼れを我佛陀を
静かよ彼れを乗せつゝも
いと老實よ行きければ
「最早それよて過分ふり
總て敵對せしものも
みち一様よ答へけり
善覺長者は云ひよけり
いとも愛せる方ふれば

頸を沈めて温順よ
禮拜するも如く立ち
膝と手綱よ従ひて
之を見るより諸人は
悉達太子が勝りたる」
悉達太子が勝れると
かゝれば乙女が父親の
「太子は實よ我々の
太子の勝れ玉はんと

素より思ひ居たりしが
 獵や浮世の苦業より
 知るへき業をいつしか
 夢の間よ得てし事
 されば太子は既よ早や
 かくて榮ある乙女子は
 静かよ立ちてモグラなる
 黒と黄金の面衣とば
 前をとつかよ歩み過ぎ
 太子のもとよ來りけり

さるよてもまた戦争や
 得るよ勝りて大人の
 薔薇の亭のその中よ
 如何ある魔王の教へし
 得たる寶を持ち玉へ
 群集の中よ己が座を
 花の冠取りつよも
 軽く被ひつ公子等の
 御威稜かしまくおまする
 今ぞ太子は馬を降り

馬は太子の手の下よ
 曲げて居たるその時よ
 うやまひ拜して喜びの
 いふべき顔を顯せり
 自ら太子の頸よかけ
 己が頭を置きつよも
 眼を足よ注ぎつよ
 御手の寶とかりよけれ
 面衣を掩ひるるともよ
 手とりあひてゆくを見て

強きうかじをやはらげて
 彼の耶輸陀羅は太子とば
 愛かゞやきて天女とも
 さて香しき花冠を
 太子の胸の其上よ
 たかくほこれる悦びの
 愛せる君よ妾こそ
 再び黒と黄金なる
 互ようごく胸と胸
 諸人よるこびいたひけり

程經て成道ありしとき
 何故ありて耶輸陀羅は
 打被りしやまた箇程
 世尊は答へ玉ひけり
 半知られて見へたるも
 過よし事も考へも
 再び歸り來るなれば
 幾萬年のその昔
 さすらひめぐる虎ありき

人々問ひき「彼時よ
 黒と黄金の面衣をば
 ほかりかほには歩みしや」
 「否余とても知らざりし
 生死のわだち廻る間よ
 また埋もれる生活も
 今こそ思ひ當りたれ
 ヒマラヤ山の深林を
 我れこの佛陀は其時よ

註(牡虎の生を
 受けたれば)

死よ近づくと知らずして
 獸の群を繰る
 夜はまた星を戴きて
 みちをば鼻ぎで残墟よ
 我が仲間ふるけものらは
 美妙の牝虎居てければ
 争ひをまそ始めたれ
 被りしものゝその如く
 黄金色よが輝ける

草の中よが伏しつゝも
 我窩のまわりよ餌食せる
 かぐやく眼もて窺ひき
 人と鹿との踏みたりし
 飽をも知らであさりけり
 森の中よて第一の
 牡虎はすぐよ一場の
 牝虎の皮は耶輸陀羅の
 黒きいろよて繡とりつ
 牙と爪との争ひを

いよゝはげしく成りけるも
 戀よ流せし血の川を
 今去そ思ひ出したれ
 わか倒したるそれこれの
 なまめく足もてうねたてる
 互ひよ思ひ思はれつ
 共よ廣野よ出よけり
 卑く高くも廻るなれ

太子は夫人を得たりけり

牝虎は始終我々の
 打ち守りて居たりける
 牝虎は終よ我よ添ひ
 敵をば越へて吼へつゝも
 わが太腹を撫でさすり
 いとほおりげよ歩みつゝ
 生死の輪去そやすみなく

意中の獲ものを得たりけり

赤羊宮よ當りたる
 婚儀の筵ろ開きけり
 金牛を置き絨氈を
 花環を飾りうでひもを
 米と香油を撒きたりし
 二片の藁の近くは
 愛の兆とは知られけり
 聖の大衆に施物なし
 賛美の歌を唱ひつゝ
 結びてこそはいはひけり

星の廻りのよき時よ
 釋種の例よ従ひて
 布き擴げつゝ婚姻の
 結びつ甘き菓子と破り
 赤き乳汁よ浮べたる
 死する時まで變らざる
 三度七歩よ火を廻り
 供養賑恤數多く
 新郎新婦の衣服をば
 頭よ霜を戴ける

高士はいみじく云ひにけり
 われらもものゝ耶輸陀羅は
 ものにしあれば一生を
 愛でいつくしみ玉ふべし
 喇叭の樂を奏しつゝ
 太子の御手にわたしにき
 されど大王今も尙
 疾く諸人に布令なし
 これぞ宏大美麗なる
 廣き世界を尋ぬるも

「尊き太子よ今までは
 今より一に唯君の
 君に托する此人を
 されば彼等は歌うたひ
 「彼のうつくしき耶輸陀羅を
 隈なき愛こそ久しけれ」
 愛のみたのみとなさずして
 愛の牢屋を築きけり
 ビスラムバンの城にして
 この樂園に相並び

目と驚かすものぞなき
 緑の小山聳へたち
 〓ロヒニの河水いよ清く
 恒河の波に支流をば
 南のかたにあたりては
 薄空色をあらせせる
 遠く世塵を避けたれば
 街の市なす聲々も
 蜂の唸るにさも似たり
 清き山路はいと白く

廣き御苑の正中に
 麓に濺ぐ流せこそ
 〓ヒマラヤ山の裾野より
 そゝがん爲に來るなれ
 酸果やサルマリンダの森ありて
 ガンナの花の生ひ茂り
 風のまにくつたへ來る
 林の中に隠れある
 北に聳ゆるヒマラヤの
 嘗て踏みにし人もなく

驚くべくも限りなれ
 峨々たる巖切り成す岡
 刻める如き絶壁は
 身の毛彌立ち天上に
 語るも如き風情なり
 暗き樹林の廣がりて
 雲の面衣を被りつ
 薔薇櫛に縦の森
 豹の叫びも静かにて
 輪を成し翔る大虚の

廣き高地に高た峯
 緑の斜坡や氷角や
 攀る心もいや高く
 立ちて間近く神々と
 雪の高嶺のふもとは
 飛び散る瀧に繡どられ
 尙其下につらなるは
 木精にひゞく孔雀の音
 岩根に遊ぶ野牛の聲
 鶯の叫びも聞ゆなり

千草の色は春めきて
 禮拜堂に敷き延べて
 見ゆるばかりよ輝けり
 光りまばゆき堂宇をば
 小山の上よ築きたり
 外に廊廓を廻らして
 ラダー、クリレユナ、又林女
 畫をばほりてぞ備へたる
 ガ子シヤの神は智と富と
 環と釣を手に取りて

平野の面にも互亘り
 神机を置ける絨氈と
 かゝる景色を見たとして
 夥多の匠工打ち集ひ
 側にものみ塔を立て
 梁には古史よ傳へたる
 シター、ハヌマン、ドロバチの
 中央に立てし立關の
 運び入るべき其爲に
 象鼻を垂れて座りとり

御園の面に蜿々ある
 白薔薇色のあや浮ける
 内門にこそいあるなれ
 闕は雪花石膏よ
 繪畫の彫りそ美麗なる
 鬱ある亭に到るまで
 方眼格子の廓を過ぎ
 こゝにはおどる冷泉の
 青黄赤白その中に
 眼涼しく羚羊は

みちを遙かにわけ入れば
 大理石にて築きある
 門楣は青石もて造り
 栴檀材の扉あり
 さて又高き書院より
 彩色なせる屋の下に
 結構盡すきざはしや
 蓮の詠め彌勝さり
 あまゐの魚もおどるなり
 光りかゞやくおのが巢に

咲ける薔薇を食みて居り
 椰子の園生に遊ぶなり
 鍍金なしある屋の椽に
 光りまばゆき敷石の
 静かに見やる青莊や
 花に戯る黄色鳥
 蜥蜴もさらに恐れなく
 はしるもすべてのどかなり
 内氣の黒蛇も日光に
 麝鹿も爰に遊ぶなり

霓色なせる金鳥は
 灰色の家鳩は
 安らなる巢を造りけり
 上には孔雀尾を垂れて
 樹々に飛びかふ鸚鵡鳥
 格子に止る憶病の
 栗鼠も餌みを得ん爲に
 家内に福を與ふてふ
 蟠りてず伏し居れり
 谷の猿猴も鳶色の

眼を光らして飛び還る
 愛の宮居はうつくしき
 唯一として愛らしき
 温和の言葉よるこびて
 悦ぶへきを悦びつ
 唯命よこれ従へり
 志づかぬ流るゝ水に似て
 忘れぬまてゝ迷はする
 耶輸陀羅かりと知られたれ

里の鴉と群れ遊ぶ
 近侍のものゝ住みぬれば
 貌と柔和の顔色と
 働く外はあらざりき
 樂むべきを樂みて
 かこらぬ花を岸として
 いつ年月のうつるとも
 妖魔の宮の望こそ

かゝる宏大美麗なる
 秘密の室は奥ふかく
 心静めん其爲よ
 空を屋根とし圍ひたる
 大理石もて造りたる
 同じ質なる板石を
 階と柱のまわりには
 すべて彫り付けたりければ
 歩むも如く思はるゝ
 その壁龕よ過りつゝ

數百の室またちまさり
 業と意匠の手段よて
 建て設けたる入口は
 庭の真中よ乳白の
 大槽ありてその上よ
 掩ひて槽の周圍また
 瑪瑙の石の鑲箱を
 夏尙寒く雪のうへ
 黄金色なる日光ハ
 暗くも見へて青白く

しるかね色の蔭とふり
 門よ至れば晝やみて
 夕べの起るが如くふり
 世界の一大不思議なる
 香を放つともし火の
 入れんが爲に設けたる
 いと柔かき照らしける
 知るもの絶へてはらざりき
 日出よりも麗かき
 常に注ぎてあればふり

さして恰も此亭の
 愛と静和の其中よ
 門を打たぎうつくしき
 室よいたれば窓よりぞ
 唯最愛のもののみを
 絹褥錦衣のその中よ
 こよよハ誰れも夜晝を
 温和の光線いと清く
 夕陽の如く柔かき
 甘き空氣は朝よりも

尙樂みと與へつゝ
 呼吸の如くは快し
 珍味の食をからべつゝ
 雪も凍る飲料と
 美肉とともに木乳は
 夜となくまた晝となく
 舞妓常に侍るふり
 太子の目をばあふぎつゝ
 花間よ響く音楽や
 樂ましむる其中よ

そのまぐしさは眞夜中の
 夜と晝との分ちなく
 露けき美菓とヒマラヤの
 調理の術を盡したる
 おのく象牙の杯よりも
 官女は觴を行ひて
 美姫ハ眠れる幸福の
 また目覺めたるその時を
 戀の歌舞もて心魂を
 らんじやの薰りほのめきて

彼れの心はいつしかよ
傍へよねむるそれまでよ
思ひを忘れ住み玉ふ

彼のうつくしき耶輸陀羅の
悉達太子はもろくの

また其上よ大王は
老死哀悼疾病を
爰の殿居の其中よ
其足よるめく事あらば
この樂土より逐ひ放ち
見て悲むを防ぎたり

凡べて廓の内よてハ
語るを禁じ玉ひけり
もし眼くるめき踏るうち
つみよあらざる罪を得て
太子の彼れがかかしみと
飢饉疫病憂苦の有様も

死よ泣く人のかかしみも
まべて此等の不吉ある
かたらふものありもせば
直よ罪を正すあり
歌舞を奏する舞姫の
謀叛とあして刑へり
摘みとてられて枯る葉も
残らず取りぞ除かれき
もし彼れよして幼年よ
術かく暮らすそのうちは

茶毘の烟りのものすごき
外界の事をしかくと
眼とるどき從卒は
もし一線の白髮の
その絨毛よあるふれば
萎る薔薇は朝ごとよ
共よかくされ凶兆は
大王常よ云ひけらく
思案執念起まべき
人よ不相應ぬ命運の

影もおそろく萎み得て
治めん時に立派なる
もし彼れよして世よ立たば
我れも榮ある王代を見ん

彼れが率士の濱までも
王とやらんを見るべきぞ
王の王あり世のほまれ

されば愛をば獄吏とし
あせしハ人の目よふれず
めぐりよ王は大壁を
その壁門は青銅の
之を開くよ百人の

和樂を以て鐵條と
かゝる樂しき牢獄の
命じて築き建て玉ふ
おもき扉をとごしたり
兵を要むと云ひ傳ふ

開く響きの聞ゆるは
この門内よまた一つ
この樂殿を出んよは
通らぬ事ハかりがたし
いとも堅固よ鎖閉して
番兵をこそおきよけれ
誰人よても此門を
たとひ太子よあればとて
よし我子よてあればとて

半踰繕那よ達をべし
また其内よ門ありて
必らず三重の門戸をば
此等の三の大門は
上よハ忠義老實の
かくして王ハ命じたり
過ぎ行くことを許さぐれ
命よかへて守るべし

明治二十三年四月十六日印刷
明治二十三年四月十八日出版

定價金十八錢

版權
所有

著作者

山口縣士族

中川太郎

京都市下京區若宮通花屋町南入
西本松町第四番戶寄留

發行者

福岡縣平民

神代洞通

京都市油小路北小路上ル玉本町
五番戶寄留

印刷者

兵庫縣平民

清水精一郎

京都市油小路北小路上ル玉本町
六番戶寄留

發行所
賣捌所

京都市油小路北小路上ル

京都市本郷區本郷四丁目

興教書院
哲學書院

大 賣 捌 所

同	京橋區三十間堀	開導書院
同	心齋橋筋一丁目	明教社
同	大阪市心齋橋通北久寶寺町	丸善書店
同	名古屋市門前町十七番戶	松村九兵衛
廣嶋市橋本町		三浦其中堂
京都市東中筋花屋町東入		末田恕之助
同	三條高倉東入	永田長兵衛
同	五條高倉東入	出雲寺文次郎
同	東六條中珠數町	澤田友五郎
同	油小路花屋町上ル	西村七兵衛
同	越中國富山市上リ立町	松田書店
		福田清明堂

(印刷所 大阪市東區北久太郎町二丁目 大阪活版製造所)